

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370241

研究課題名(和文) 室鳩巢の和文著述とその流布・影響についての研究

研究課題名(英文) Study of Muro Kyuso's Japanese writings and its dissemination and influence

研究代表者

川平 敏文 (KAWAHIRA, TOSHIFUMI)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：60336972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、室鳩巢の代表的な和文著述『駿台雑話』について、20以上の書誌調査を行い、2種類の版が存在することを確認した。また、本書は近世期のみならず昭和20年頃まで、高等学校などの国語や倫理の教材としてよく読まれていたことを明らかにした。第二に、『駿台雑話』における武家説話と強い関連を持つ『赤穂義人録』について、本書が東アジアの漢字文化圏において広く読まれること期待して書かれたことを指摘した。第三に、『六諭衍義大意』の成立背景について、東アジアの教育動向との連動という問題を加味して考察した。第四に鳩巢の代表的な和文著述4編について、全文電子テキスト・データを作成し、WEB上に公開した。

研究成果の概要(英文)：First, about Muro Kyuso's typical Japanese writing "Sundai-zatsuwa", I conducted more than 20 bibliographic studies, and confirmed that there are two types of plates. In addition, I made it clear that this book was read as teaching materials of Japanese and ethics in the high school, until around 1945 as well as the Edo period. Second, I pointed out that "Ako-gijinroku" which has the strong relationship with samurai tale in "Sundai-zatsuwa", was written with expectation that widely reading in the East Asia. Third, about the background of the making of "Rikuyu-engi", I discussed by adding the problem of interlocking with educational trends in East Asia. Fourth, about the representative 4 Japanese writings written by Muro Kyuso, I converted into electronic text data and published on the web.

研究分野：日本近世文学

キーワード：室鳩巢 駿台雑話 六諭衍義大意 和文 徳川吉宗 談義本 赤穂義人録

## 1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで、江戸期における文学と思想との相互関係に注目する研究を続けてきた。それを踏まえて、今回の研究テーマとの関連、および鳩巢研究の現況について記したいと思う。

### (1) 儒学と和学という視点

報告者がこれまで取り組んできた研究テーマの一つに、「儒学史と和学史との交渉」という問題がある。たとえば拙稿「和学史上の林羅山『野槌』論」(2010年)では、儒学者・林羅山の『徒然草』注釈の姿勢が、その後の和学(広義の日本古典学)、ひいては当代文芸のあり方に重大な影響を与えたことを指摘した。それは「情」の基本的肯定、秘伝主義の批判といった諸要素である。

このような視点から、鳩巢の代表的な著述である和文随筆『駿台雑話(すんだいざつわ)』(享保17年<1732>序、寛延3年<1750>刊)を見ると、そこに興味深い事実が浮かび上がってくる。本書はいわゆる「儒学者」の著述でありながら、『徒然草』をはじめとする日本古典に関する言及が多く、鳩巢が和学にかなり深い造詣を有していたことが窺えるのである。すなわち「和学者としての鳩巢」という視点からも、彼の学問は再定位する必要がある。

### (2) 教訓本・談義本史との関わり

次に、報告者が取り組んできた別の研究テーマとして、「江戸時代における老荘思想の受容」という問題がある。江戸中期には、老荘の思想や表現を援用した教訓本、あるいは寓話小説(いわゆる談義本)が多数述作されるが、その口火をきったのが、佚斎樗山(いっさいちよざん)という人物であった。拙稿「岩田彦助の人と思想 熊沢蕃山・佚斎樗山との関係」(2013年)では、その樗山と関係を有した岩田彦助なる人物の、伝記および思想上の特色について考察した。

ところで、先行研究(三田村鳶魚『教化と江戸文学』1942年、中野三敏『戯作研究』1981年)では、この教訓本・談義本の流行という文学現象の背後には、いわゆる「享保の改革」における庶民教化政策があったと言われている。その政策の象徴とも言えるのが、鳩巢が訳述を命ぜられ、官刻という形で流布した仮名教訓本『六諭衍義大意(りくゆえんぎたいい)』(享保7年<1722>刊)であった。教訓本・談義本の述作精神およびその流行を考えるうえで、それらと鳩巢の著述との関連は重要な問題系となってくるのではない。

### (3) 鳩巢研究の現況

以上のような経緯から鳩巢に注目し、その研究状況を眺めてみると、鳩巢の学問の独自性についてはもちろん、そもそもその著述活動の全容が、十全に把握されているとはいいがたいことに思い至る。たとえば伝記研究としては、辺土名朝邦「室鳩巢」(『叢書日本の思想家』11所収、1983年)があるが、儒学

史上における位置づけに偏っており、再検証すべき余地が多い。また鳩巢の詩文については、近年、杉下元明「享保期の室鳩巢」(2010年)ほかの諸論により、かなり詳細な報告が積み重ねられているが、思想や文学観については、荒木見悟「室鳩巢の思想」(日本思想大系34所収、1970年)、高橋博巳「室鳩巢における近世的自我をめぐる」(1977年)など、極めて少数の考察しか存在しない。まずはその著述活動の全体的把握から始め、そのうえで個別の議論を展開することが必要だと考えた。

## 2. 研究の目的

### (1) 『駿台雑話』の諸本と受容

先述のように、『駿台雑話』は鳩巢の著述のなかで最もよく知られており、鳩巢研究の基礎的文献である。その内容は、当世儒学諸派に対する弁論や、和漢の文学作品に関する講評、戦国期武士たちの武辺咄などで、達意の和文によって綴られている。本書は刊行当時からよく読まれたと思われ、多数の伝本が現存するが、その流布の実態はこれまできちんと把握されていない。また、明治期から昭和二十年頃にかけて、本書の注釈書・抜粋本が十種以上刊行されていることも、注目すべき事実である。そのような近代における諸本の広がりも視野に入れる。

### (2) 『駿台雑話』の注釈的研究

本書の注釈書としては、関儀一郎『駿台雑話注釈』(1902年)が、その典拠研究においては最も充実した成果である。本書は、『駿台雑話』において鳩巢が依拠したであろう和漢の様々な典籍を、具体的に指摘している。しかしながら、そこから鳩巢の学問や文芸観を深く掘り下げて読み取る研究は、それ以後ほとんど積み上げられていない。本研究では、この『注釈』を再検証しながら、和学史、特に「もののあはれ」論成立史上における位置、反徂徠学書の嚆矢としての意義、近世武家説話集としての特性という三つの切り口から、『駿台雑話』の新たな読み解きを行いたい。

### (3) 『六諭衍義大意』の発刊とその反響

次に鳩巢の著述の中で、『駿台雑話』と並んでよく知られているものとして、『六諭衍義大意』を取り上げる。本書は、中国・明末清初期に流行した教訓本『六諭衍義』の要諦を、将軍・徳川吉宗の命を受けて、鳩巢が平易な文章に翻訳したものである。夙に三田村鳶魚は、本書の発刊が、佚斎樗山らの教訓本・談義本の流行を促した可能性を指摘している(前掲書)が、その具体的な考察にまでは踏み込んでいない。本研究では、『大意』には、鳩巢のどのような思想が反映されているのか、『大意』とその後の教訓本・談義本の内容は、具体的にどのように関連しているのか、といった問題を明らかにしたい。

### (4) 「鳩巢書誌データベース 和文著述編」の構築

国文学研究資料館がWEB上で提供している「古典籍総合目録」によれば、鳩巢の著述としては148点が著録されている。鳩巢伝記の全体的な究明のためには、これらの資料の網羅的な調査が不可欠である。ただしその数量からして、これを短期間で成し遂げることは難しい。そこで本研究期間中には、本研究テーマと関連が強い著述、すなわち鳩巢が和文（ここでは片仮名本も含めて考える）で書いた随筆・雑記・教訓本類を中心に、その書誌・内容を詳細に調査する。また、その本文をデータ化し、WEB上で公開する。

### 3. 研究の方法

前記「研究の目的」(1)～(3)を、それぞれ1年目～3年目に担当し、その年度の中心的研究課題とする。すなわち、1年目は「(1)『駿台雑話』の諸本と受容」、2年目は「(2)『駿台雑話』の注釈的研究」、3年目は「(3)『六諭衍義大意』の発刊とその反響」に取り組む。そしてそれらの研究成果を踏まえ、4年目(最終年度)において総括的、あるいは補足的な考察を行う。また「(4)鳩巢書誌データベース 和文著述編の構築」については、1年目～3年目までに、上記研究テーマと並行して継続的に取り組み、これも4年目(最終年度)において最終的なデータベースとして完成させる。さらに研究の進捗状況は、随時ブログなどで紹介していくとともに、ホームページを新たに開設して、その成果を公開する。

#### 平成26年度

##### (1)『駿台雑話』の諸本と受容

本年度はまず、「研究の目的」(1)に取り組む。『駿台雑話』について、申請者は現時点で、少なくとも2種類の版(版本全体が相違するもの)を確認している。それらに本文異同がないかを確認する。さらに、明治から昭和前期にかけて、主として活版で刊行された抜粋本・注釈本については可能な限り現物を収集し、近代において、なぜこれほど多くの抜粋本・注釈書が刊行されたのかを考える。

##### (2)『駿台雑話』の本文データ入力

次に、次年度以降の本格的な研究に備えて、「研究の目的」(2)についての基礎的な作業を開始する。具体的には、『駿台雑話』の本文が容易に検索・活用できるよう、テキストデータをパソコンに入力する。そして、ここで入力したテキストデータは、最終年度にインターネットで公開し、研究者のみならず、一般人にも幅広く利用できるようにする。なお本作業は、江戸文学を専攻する大学院生数名に、アルバイトとして協力を仰ぐ予定である。

##### (3)鳩巢書誌データベース 和文著述編の構築

また、「研究の目的」(4)の調査を開始する。この調査は、1年目～3年目を通して継続的に実施し、最終年度にデータベースとして完成する。本研究テーマと関連が強い著

述、すなわち和文で書かれた随筆・雑記・教訓本類を中心に、その書誌・内容を詳細に調査する。そこで本年度は、関東地区1回、関西地区1回、その他1回というペースで、1回につき2泊3日の旅程で調査を行う。その際、なるべく書誌調査の現場で直接データ入力できるよう、モバイル型パソコン1台を購入する。また必要に応じて、デジタル画像データ・紙焼写真などの複写物を入手する。

#### 平成27年度

##### (1)『駿台雑話』の注釈的研究

本年度はまず、「研究の目的」(2)について、前年度に作成した『駿台雑話』本文データを活用しながら考察する。具体的には、『駿台雑話』の中から、鳩巢が日本古典文学(特に和歌)・儒学思想・武家説話などについて言述している箇所を抜き出し、その知識的背景や思想的特性を炙り出す。その際、『駿台雑話』以外の鳩巢の著述はもちろん、同時代における和学・儒学・兵学など各方面の文献、およびその研究史にも十分に目配りする。

##### (2)『六諭衍義大意』の本文データ入力

次に、次年度以降の本格的な研究に備えて、「研究の目的」(3)について基礎的な作業を開始する。具体的には、『六諭衍義大意』の本文が容易に検索・活用できるよう、本文をパソコンにデータ入力する。作業従事者・成果報告などは、前年度「研究の方法」(2)と同じ。また、『六諭衍義大意』の諸本については、東恩納寛惇(『全集』巻8所収)、杉下元明(『六諭衍義大意』の諸本)(2009年)による研究の蓄積がある。それらを踏まえながら、できる限り諸本の書誌を確かめる。

##### (3)鳩巢書誌データベース 和文著述編の構築

前年度に引き続き「研究の目的」(4)を行う。調査地域・調査日程・目標点数など、前年度と同じ。

#### 平成28年度

##### (1)『六諭衍義大意』の発刊とその反響

本年度はまず、「研究の目的」(3)について、前年度に作成した『六諭衍義大意』本文データを活用しながら考察する。具体的には、荻生徂徠訓点『官刻 六諭衍義』、中村三近子『六諭衍義小意』、水野正恭『六諭衍義大意抄』、著者未詳『六諭衍義巷談』などとの対比を通して、『大意』の独自性を明らかにする。また、特に享保期に成立した教訓本・談義本類の内容を精査し、『大意』との思想的関連性を考える。これについては、申請者の勤務校である九州大学附属中央図書館所蔵読本コレクション所収の資料を最大限活用する。

##### (2)『六諭衍義大意』関連書の本文データ入力

本年度の「研究の方法」(1)に関連して、『六諭衍義小意』『六諭衍義大意抄』『六諭衍義巷談』などの『大意』関連書から特に重要なものを選定し、その本文をパソコンにデータ入力する。これらは未だ翻刻されていない

い資料なので、学術誌などの紙媒体で紹介する。作業従事者・成果報告などは、平成 26 年度の(2)と同じ。

(3) 鳩巣書誌データベース 和文著述編の構築

前年度に引き続き、「研究の目的」(4)を行う。調査地・調査日程・目標点数など、前年度と同じ。

平成 29 年度

(1) 本研究の総括および補足

本年度は、これまでの研究を踏まえ、『駿台雑話』および『六論衍義大意』を中心とした、鳩巣の和文随筆・教訓本の内容的問題、そしてその後代文学・思想史への影響について、総括的な考察を行う。また、これまでの研究において不十分であった点を補足する。

(2) 鳩巣書誌データベース 和文著述編の完成

前年度に引き続き、「研究の目的」(4)を行う。ただし本年度は最終年度なので、調査規模は前年度の半分程度とし、これまでに集積したデータの整理を行い、データベースとして完成させる。

(3) 研究成果・各種データの公開

これまでに発表した論考、あるいは考察のために入力した各種テキストデータ、そして上記書誌データベースを、インターネット上で公開する。データの校閲、ホームページの構築などの作業は、江戸文学を専攻する大学院生数名に、アルバイトとして従事してもらう。

#### 4. 研究成果

上記「研究の目的」に沿いながら、実際の成果の概要、および当初の目的との関連などについて述べる。

(1) 『駿台雑話』の諸本と受容

『駿台雑話』の近世期における諸本については、期間中に 20 本以上の書誌調査を行った。その結果、2 種類の版が存在すること、および版元がたびたび変動していることなどが確認された。このことについては、諸本をより広範囲に遺漏なく調査する必要があるため、まだ論文等の発表を控えている。

また『駿台雑話』の受容については、〔図書〕において考察した。

この論文においては、まず本書が近世期のみならず、明治～昭和 20 年頃まで非常によく読まれていたことを明らかにした。活字本、注釈本、教科書・副読本への採用など、その受容の広がり(多様化、浸透度)は、むしろ近世期を凌ぐほどであった。すなわち本書の影響は、昭和 20 年頃(戦前)までの射程を持っていたということである。近代以後、朱子学的な思想は葬り去られたような印象があるが、しかし戦前までは、教養の根本(スタンダード)として、それが息づいていたことが分かる。

鳩巣は朱子学の祖述者として、特にその学説に、思想史的な大きな魅力は見出されない。

しかし朱子学という中国の思想を、日本の和歌・故事などの知識と結びつけながら、暢達な和文(平仮名文)で書き記していることが、本書が長く読者を持ちえた理由であろう。その意味で、鳩巣の和歌・和学の素養は改めて注目されるべきである。

(2) 『駿台雑話』の注釈的研究

和学史、特に「もののあはれ」論成立史上における位置については、本年 6 月に行われる研究会において、口頭発表予定である。本居宣長の「もののあはれ」説は、直接には師である堀景山、あるいは 18 世紀の古学派の言説などの影響によって成立したというのが定説であるが、朱子学あるいは 17 世紀歌学からの流れも考えるべきであるというのがその主旨である。鳩巣の『駿台雑話』に、それを考える一節があることを紹介する。

反徂徠学書の嚆矢としての意義については、上記拙稿のなかに略述した。『駿台雑話』はいわゆる朱子学啓蒙書であるが、同時に陽明学派、仁斎学や徂徠学といった古学派への痛烈な批判書である点が重要であることを指摘した。特に徂徠学への批判は、18 世紀中・後期の上方を中心に起こってくると言われているが、本書はそれよりも早く、しかも江戸で行われているのであり、徂徠学が席卷しているように見える江戸の儒学界の認識に、一考を促すものではないか。

近世武家説話集としての特性という視点についても、上記拙稿のなかに略述した。本書には戦国～近世初期の武家の説話が豊富に載せられている。その意味で、鳩巣は本書の読者として武士階級を想定していたことが分かる。すなわち、武士のあるべき「道」(忠義)を説くことに、大きな意図があったのである。

また に関連して、〔図書〕 を発表した。鳩巣には、大石内蔵助を筆頭とする赤穂藩の浪人武士たちが起こした、吉良邸襲撃事件を論評した『赤穂義人録』という著述がある。

一般に、本書は彼らの行動を称賛した書だと考えられているが、鳩巣は本書において、事実を叙すると同時に、客観的に賛否を加えていく。すなわち歴史書として記述しているのである。そして、その文体が漢文であり、所々に日本の習俗 日本人にとっては自明な事柄 についての解説を挟んでいることを考えれば、鳩巣は本書を、東アジアの漢字文化圏で読まれることを視野に入れて執筆していたのだと思われる。

『駿台雑話』所載の武家説話は、こういった鳩巣の赤穂浪士論のほか、『駿台随筆』『駿台閑話』『駿台要語』などの写本随筆、あるいは門人宛の書簡などを集めた『可観小説』『鳩巣小説』『兼山秘策』などに所載の武家に関する言説を勘案して、読み解く必要がある。

(3) 『六論衍義大意』の発刊とその反響

『六論衍義大意』が発刊されるまでの経緯については、『兼山秘策』においてかなり詳

細に知ることができる。その概要は、上記の東恩納寛惇が紹介しているが、〔雑誌論文〕

では、これをより詳細に考察した。

本考察は、もともと本書を鳩巢の著述としてとらえ、その内容を分析するという目的をもって始めたのであったが、考察過程において、本書発刊に占める徳川吉宗の関与が非常に大きいことに思い至り、結果的には吉宗の側に立って、本書刊行の意図や背景を考えるとことになった。

「六諭」は中国の明代から清代にかけて、庶民教化政策の基本とされていた、六ヶ条の教訓標語である。17世紀末には、中国本土のみならず、台湾や琉球においても、この六諭による教化が行われていた。つまり、東アジア世界における教育の「国際標準」であったのだ。明・清の法律などに強い関心を示している吉宗は、文教政策においても、この国際的な教育動向を意識し、それを積極的に導入しようとしたと考えられる。吉宗下命による『六諭衍義』関連書の刊行は、従来、琉球使節団からの該書献上に触発されて起こったというように、漠然と考えられてきたが、吉宗による計画的な研究事業であったことを指摘した。

鳩巢による『六諭衍義大意』の編述は、そうした吉宗主導の政策のなかで行われたわけであるが、『兼山秘策』に所載の鳩巢の報告からは、吉宗の教化観との相違点も窺える。鳩巢は明清風の、政治主導による強制的な教化を提言していたが、吉宗は民間主導による緩やかな教化を理想としていた。どちらがより効果的であったかは分からないが、少なくともこの後、談義本といわれる通俗教訓本が叢生したこと、『六諭衍義大意』が民間や地方の諸藩において、近世後期まで盛んに出版され続けたことなどを考えれば、吉宗の文教政策は一定の成果を収めたと言えるのではない。

またこれに関連する業績として、吉宗の文教政策に呼応して著されたと思われる岩田彦助の教訓本『従好談』の翻刻を発表した（〔雑誌論文〕、）。彦助は鳩巢の『駿台随筆』や『鳩巢小説』のなかで、学問に一家言ある秋元藩家老として紹介されている。

(4)「鳩巢書誌データベース 和文著述編の構築

期間中に、『駿台雑話』『駿台随筆』『駿台閑語』『駿台要語』『駿台秘書』『六諭衍義大意』『鳩巢小説』などといった鳩巢の和文著述の書誌調査を、国会図書館、内閣文庫、金沢市立玉川文庫などを中心に行い、画像もふくめ、データを蓄積した。とはいえ、書誌データベースという形ではいまだ整理しきれしていない。今後の課題である。

ただし、『駿台雑話』『駿台随筆』『六諭衍義大意』『鳩巢小説』については、その全文電子テキスト・データを作成し、個人の研究用WEBページにて公開した。HTML版でページ内検索もできるほか、ワード版データは、フ

リーでダウンロードできるようにしている。これにより、鳩巢の主要な和文著述の語彙検索・本文引用などが容易になったと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

川平敏文「徳川吉宗の文教デザイン 『六諭衍義大意』研究ノート」(『語文研究』第124号、2017年、査読無、pp.14-33)

川平敏文・村上義明「『従好談 翻刻と解題(下)』」、『文献探究』第53号、2015年、査読無、pp.56-76

川平敏文・村上義明「『従好談 翻刻と解題(上)』」、『文献探究』第52号、2014年、査読無、pp.68-91

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

川平敏文「室鳩巢『赤穂義人録』論 その微意と対外意識」(井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』所収、勉誠出版、2016年、pp.117-142)

川平敏文「室鳩巢『駿台雑話』 近世～戦前における「知」のスタンダード」(井上泰至・田中康二編『江戸文学を選び直す』所収、笠間書院、2014年、pp.30-43)

〔その他〕

ホームページ

閑山子 LAB にて、『駿台雑話』『駿台随筆』『六諭衍義大意』『鳩巢小説』の全文テキスト公開

<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~kawahira/#library>

コラム

川平敏文「名儒の愚息」(共著コラム「雅俗草露」のうち、『雅俗』第17号、2018年、pp未定)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

川平 敏文 (KAWAHIRA, Toshifumi)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授  
研究者番号：60336972